

## &lt;書 評&gt;

NHKドラマ番組部監修，NHK出版編

## 『朝ドラの55年：全93作品完全保存版』

(NHK出版，2015年，256頁)

軽 部 恵 子

本書は、NHK連続テレビ小説（以下、「朝ドラ」と略す。）を1961（昭和36）年の第1作から2015（平成27）年後期の第93作まで紹介したものである。巻頭インタビュー特集の扉には、「朝ドラは移りゆく時代の空気や人々の生活感を映しつつ、さまざまな作品を生み出してきた」と書かれている。まさに、評者が本書を取り上げた理由である。

朝ドラは昭和の30余年間と平成の四半世紀あまり、朝の8時台に出勤前の時計代わりとして、政治・経済・文化の変化を反映する鏡として、日本社会に多大な影響を及ぼしてきた。

朝ドラの時代設定は様々である。明治・大正・昭和を俯瞰するもの、戦中を舞台とするもの、昭和の現代劇であったもの、平成を舞台にするものなどである。女の生涯を1年かけて描いた「おしん」（1983年度放送）は、明治・大正・昭和を生き抜いた女性実業家の物語であった。1990年代に入ると現代に設定したものが増えてきたが、2000年代後半から昭和の話が増えてきた。最新作「あさが来た」は朝ドラ史上初めて、幕末から物語が始まっている。

朝ドラの主人公には圧倒的に女性が多い。実在の人物もいれば、まったく

架空の人物も含まれる。視聴者にとって、実在の人物をモデルにした方が興味をそそられる。たとえば、『赤毛のアン』シリーズの翻訳者として知られる村岡花子が2014年前期のヒロインとなり、「赤毛のアン」ブームを再燃させた。2014年後期は、ニッカウキスキー創設者の竹鶴政孝と、その妻リタをモデルにした。朝ドラ史上、外国人がヒロインとなったのは初めてである。2015年後期は、大同生命の創設者で、日本女子大学の創設に尽力した明治の女性実業家、広岡浅子がモデルとなっている。

本書の特徴は、単に歴代ドラマのストーリーを紹介するだけではない。巻頭にとくに人気を博したドラマのヒロインたちのインタビューが掲載されている。ジェンダーを研究してきた筆者にとって、感慨深い点が少なくない。たとえば、デザイナーの小篠綾子（コシノ三姉妹の母）を主人公にした「カーネーション」（2011年後期）のヒロインのオーディションには、尾野真千子が合格した。30歳目前だった。ヒロインは20代半ばの女性が多くなる中、演じるヒロインの年齢が幅広かったとは言え、異例であった。2015年は男女雇用機会均等法が施行されて30周年にあたるが、均等法以前の日本の職場では、30歳を過ぎた女性は既婚でも未婚でも、退職を強く勧奨されたものであった。

1985年前期は、沢口靖子主演「濡つくし」が大人気を博した。ヒロインは醤油醸造元の資産家の娘だが、妾の子である。当時まだ堅かったNHKとしては、かなり異例の設定だった。長年、日本では、非嫡出子の相続分が嫡出子の半分であったが、ようやく2013（平成25）年12月に民法の一部を改正する法律が成立した。ちなみに、シングルマザーも朝ドラのヒロインとなったが、それは2000年前期の「私の青空」であった。

漫画家の水木しげるも朝ドラに登場した。武良布枝が書いた『ゲゲゲの女房』を元にした朝ドラ「ゲゲゲの女房」は、漫画家の妻が主人公だったが、夫の才能を信じ、戦争で左腕を喪失した夫を支える献身的な姿で感動を呼んだ。ドラマは民放の番組が特集を組んで取り上げるほど人気となった。な

お、周知のように、水木は、妖怪ものだけでなく、自身の戦争体験を元にした漫画『総員玉碎せよ!』、『水木しげるのラバウル戦記』、『敗走記』などで戦争の無意味さを訴え続けたことでも知られる。2015年11月、水木は、惜しまれながら93歳で亡くなった。

本書で最も役に立つと評者が感じたのは、ドラマの完全ダイジェストが1960年代から1990年代、2000年以降のものと年代ごとに分けられ、各セクションの冒頭に主なテレビ番組と主な出来事を記した年表を配したことである。1960年はまだテレビの黎明期と言える年で、前年の1959年に皇太子ご成婚でテレビの契約件数が飛躍的に増えた直後であった。テレビが人々に娯楽を提供し、生活に影響を与えてきたかは、懐かしいテレビ番組名と時代のできごとが教えてくれる。

思い起こせば、1960年はアメリカ大統領選挙のディベートがテレビ放映された初めての年であった。ニクソンとケネディの第1回討論会をラジオで聴いた人はニクソンが勝ったと判定し、テレビで討論会を見た人はケネディ優勢と思った。それは、不鮮明な白黒画面の中で、薄い灰色のスーツを着た病み上がりニクソンはぼやけて見えたが、若いケネディはダークスーツを着て、輪郭がはっきりしていたことなどが要因である。日本の政見放送は厳格な様式に則り制作されるが、政権のイメージ作りにテレビが欠かせない媒体であることに変わりない。

それから、朝ドラのヒロインたちは様々な職業に就き、社会が考える「女性」の枠組みを乗り越えている。とくに均等法が施行された1986年以降は、その傾向が顕著といえよう。1986年前期に放映された「はね駒（こんま）」は、明治・大正期に活躍した女性新聞記者の草分け、磯村春子をモデルにした。1987年前期の「チョッちゃん」は、黒柳徹子の母、朝が書いた自伝『チョッちゃんが行くわよ』を原作とした。天真爛漫なチョッちゃんは、社会がはめようとする枠に全くとらわれない。黒柳徹子もテレビの黎明期から活躍し、様々な障害を乗り越えてきた人だが、自身の母にはかなわないであ

ろう。1999年後期の「あすか」では和菓子職人が、2002年後期の「まんてん」では宇宙飛行士が、2004年後期の「わかば」では大工が登場する。

一方、日本のジェンダーギャップ指数は相変わらず低迷している。2015年11月に世界経済フォーラム（WEF）が発表したランキングでは、調査対象となった145カ国のうち、日本は101位であった。前年よりランクが3つ上昇したものの、女性議員の比率、男性との賃金格差などから低迷を続けている。朝ドラの中でヒロインたちが輝くのは、現実の女性たちが十分輝いていないせいか。そう言えば、2015年後期の「あさが来た」の主題歌「365日の紙飛行機」では、ヒロインの夢が「やりたいこと 好きなように 自由にできる夢」であるとAKB48が歌っている。ドラマは、人々が抱く夢の半歩先を描くから受けるのかもしれない。

以上、本書はいろいろな読み方を提供してくれる。昭和と平成を懐かしみたい人はもちろん、55年間の世相の変化を俯瞰したい人、そして日本女性の歩んだ道をドラマの設定から探りたい人などに、本書をぜひ推奨したい。